

知って当りの前 介護ガイド帳



上原喜光

朝、近所の公園で体を動かすことにしている。

そこで、80代半ばぐらいの老人を何度か見かけた。その日は、少し時間があつたので、声をかけてみた。

老人は、「待ってました」とばかりに、一気に話し始めた。

彼は現在、息子と同居しているという。長男と3年、次男と2年、そして今は三男の家に3年半いるそうです。

「息子たちに、兄弟で平等に面倒を見るから、と言われましてね。うれしくて、感謝の気持ちでいっぱいです」

司馬遼の「史記」にも似たような話があつたと思います。が、こちらまでうれしくなりました。

ただ、老人の様子がどうもおかしい。

「最近、体が動かなくなってきましたね。できれば、同じところがいいんですよ……」

彼はこの8年半、まるで流浪の民のような生活をしてきたのです。3兄弟の家を渡り

歩き、三男の家にはもう3年半も世話になっている。三男の家庭も、おそらく限界なのでしよう。彼は早晚、一人娘の家に行くのかもしれませんが。「人に迷惑かけないように



と、子どもたちには言い聞かせてきました。その自分が高齢とはいえ、人に迷惑ばかりかけている。つらいですね」

自嘲交じりに、毎朝、神棚に手を合わせては、「早く迎えに来て」と祈っているのだという。

介護問題に取り組む私にとって、これは決して珍しいことではない。もし子どもの元を離れたなら、身元不明の「行旅死亡人」として人生を終える人もいますのです。

前にも話しましたが、親の介護を公的機関にばかり頼らない日本人の道徳観は、守っていくべきです。ただ、公的介護を受けながら、天寿をまっとうできる世の中にも、早くしていかなくてははいけません。

(全国介護者支援協議会会長)

タライ回し老人と話そう